検断小頭　国光利兵衛の答弁（上）

吉田紗美子

山陽道、周防徳山の地の六月はすでに真夏、白洲にすわらされた利兵衛の獄衣は、すぐに汗で黒く濡れた。髻を切られてさんばら髪となっているうえに、ときにその瞳になんともしれぬ不満の暗い炎が燃えあがるため、いかにも一癖ありげな悪相にみえる。

やがて、寺社奉行　河合三郎左衛門が着座した気配である。

取調べは、

「国光利兵衛じゃな。その方、当年、丑の何歳に相成るか」

の問いに対し、

「わたくし、当年四十三歳にて、検断を勤めますること二十八年に相成ります」

との答えをもってはじまった。

検断とは、中世以降、保安、警察、刑事事件を司ってきた役職だが、幕末にはその権限がずいぶん縮小されてしまい、今では牢内取締りぐらいの意味しかもたぬようになっている。検断にも上級者の死罪に立会する者と、利兵衛のように一般犯罪人の死罪に立会する者とがいる。そうして利兵衛はその小頭、いってみれば牢番の束ねぐらいの地位である。

つづいて身元調べ。

俸禄は―「はい。親代代、十三石を頂戴して今日に至っております」

住居は―「ご家中の西の外れ、勢屯町西から三番邸を拝領しております。広さは御法の通り、表六間入二十間、それと、それにおなじ坪数の竹藪が付属しておりまする」

家族は―「老母たね、妻ささの、姉きよ、それに子は弦と申す十三歳の息子を頭に三人おり、都合、七人家族であります」

忙しく動いていた書役の手の動きが一段落するのを待って、

奉行は「さて」と容を改めた。
「当、慶応元年正月に行われた、本城清以下、獄中二名の者の毒殺暗殺始末につき、お聞き込みの筋あり、委細隠さず申しのべよ」
いよいよ訊問がはじまる。
徳山藩では昨年夏からことし正月までの半年間、俗論派が政権を恣にして、(長州では佐幕派を俗論派、尊皇攘夷派を正義派とよんだ)、正義派を大粛清してしまった。
いま政権は正義派に移って、かつての俗論派要人の罪がつぎつぎに裁かれているが、利兵衛の罪は当時の寺社奉行の傀儡となって、正義派の囚人殺害をなした、というものであった。
さて、あの本城清以下が浜崎の牢に送られてきたのは、いつであったか、と、利兵衛がほんの束の間、言い澱むと、たちまち、
「有体に申さぬか。時を稼いで言い逃れの口実を考えようなどと、小細工を弄するでないぞ」
と、鞭のような叱咤がとんできた。
そうきめつけられては心外であった。
「めっそうな。さような魂胆など毛頭ありませぬ。ただ……順序立てて思い出そうとしているだけでございます」
「ふむ。その方ごとき人殺しは、この御用多端の現在、有無をいわさず打首にして然るべきであるが、格別のお慈悲をもって、かように吟味方、書役一座して取調べの場を設けたと心得よ」
その言葉をきくと、利兵衛は感謝するどころか、ぐいと頭をもたげて奉行を見た。
「では……、このお取調べは形式だけのもの、と仰せられますので……」
「否」
奉行は強く否定して、その逆だ、といった。
「当年一月、俗論派の要人がすべてその職を解かれた際、中川侑人前寺社奉行は罪を免れんとして、正義派殺戮の取調記録をすべて湮滅し去った。
ゆえにわれらは、昨元治の秋八月に俗論派がなした、藩史はじまって以来の残虐の罪を糺弾すべく、すべての証人にあたって精細な調書を作成しつつある。その方については、その脳味噌を絞りあげてもすべての記憶を曳きださねばならぬ。
存知ていようが、いまわが長州藩は幕府の長州征伐軍を迎えようとして累卵の危機にある。宗藩敗れればこの徳山の存続も危うい。ここが焦土と化せば、藩庫のすべての記録も灰燼に帰すであろう。しかし、現在作成中のこの記録のみは安全かつ厳重に保管され、百年ののち、二百年ののちにあっても、天人倶に赦さざる悪行として俗論派の罪を世に告発しつ

づけるであろう。
申しきかせておくが、ここに一座する者はみな、藩校　興譲学館で本城教授の薫陶をうけ、大いなる学恩を蒙むってきた者ばかりじゃ。その恩師を殺害したその方に、公正かつお慈悲にみちた取調べが待っているなど、ゆめ、虫のよい期待を抱くな。われらの本心を申さば、あの温順なお方を、しかも大勢すでに正義派の手中に帰した時期であったにかかわらず、その方は混乱に乗じて、い……、口にするのも憚られるが、いぬのごとくに扼殺した、われらみな、その方の鼻を削ぎ、耳を落し、八つ裂きにしても慊りぬと思うておるのじゃ。
この奉行の存念、しかと肝に銘じておくがよいぞ」
書役の手は動いていなかった。この奉行の言葉は記録されないのである。
まるで、いきなり横ッ面を張りとばされたも同然、これほどの憎悪を浴びるのでは打首を宣告されたようなものであったが、それでも利兵衛はざんばら髪を震わせて言わずにはいられなかった。
「恐れながら。お奉行様はあたかも私が下手人のごとく仰せられますが、あれは、中川様が、自分の命令はご家老富山殿の命令、富山殿の命令はすなわち殿その人の御命であると仰せられましたによって、下役たる私がどうして逆らえましょうや、一も二もなく中川様の命令に従ったまでございます」
「黙れ。すでに死者たるを幸い、中川前奉行にすべての責めを転嫁する肚づもりか。検断小頭たりしその方になんの罪もないと言い立てるか。牢番に命じて囚人を殺害させたのは中川ではあるまい、他ならぬその方自身であろうが」
そう畳みかけられて、「それは……」といったきり、利兵衛にはあと続ける言葉が見当らなかった。
これまで利兵衛は、殺人はすべて中川前奉行の命令であり、自分は番士たちにその命令を伝達しただけと信じこんでいたばかりに、なんの疚しさも感じず不敵な面構えを崩さなかった。それが、この奉行によれば、利兵衛の連帯責任は免れぬ、どころか、利兵衛自身が殺人を命令したように追求してくる。
ではどうすれば良かったというのだろう。目上、上長の命令に服従することは美徳と幼時から叩きこまれて育ってきた、それが今、中川前奉行の命令によく服従したばかりに告発されている、これは心外の極みと利兵衛は思った。
利兵衛は長年の経験から、白洲の取調べには取り調べの流れがあって、どこかで一歩躓くと、そのために流れが不利な方へ不利な方へと曲りだすのを知っていた。いまの奉行の言葉が囚人に心理的ゆさぶりをかける詭弁としても、ここで恐れ入っては負けである。この白洲が自分の打首になるか永の受牢になるかの天王山とすれば、命を懸けての駆き引きも厭わぬ、と、いったん怯んだ利兵衛の心は奮い立った。

ここ数年、時勢の針は俗論と正義の双方にめぐるましく揺れている。

宗藩（そうはん）（ご本家の萩藩）が正義を唱えると、支藩たる徳山もすこし遅れて正義を唱える。

ところが、京で宮門警護の任にあたっていた長州人の御親兵がにわかに京から逐い払われた―薩摩と会津がまさか、であったが手を組んだのである、そのころから政権を握っていた正義派に翳りがみえてきた。

翌元治元年、つまり昨年の夏、憤懣やる方ない宗藩は二千の上洛軍を押しだした、が、このとき徳山は正式に軍勢を出さなかった。つまり、宗藩に同調しなかった。そのため、正義派の若侍たちはいっせいに脱藩者の身分で参加していった。

長州勢は蛤御門に戦って利あらず、敗走して帰国したところへ、馬関に、四国聯合艦隊十七隻が来襲し、これにも惨敗、時をおかず幕府の長州征伐軍が動員されるという、まさに防長二州存亡の危機を迎えた。ここにきて、「それみたことか」と息をふき返したのはこれまで逼塞していた俗論派であった。

折も折、混乱している徳山城下にひっそりと二人の黒衣の僧が入ってきたのは、八月四日早朝。藩主に目通りしたいと願うのをはじめ相手にもしなかった徳山であったが、この二人がじつは、幕府に対する謝罪勧告案をたずさえてきた宇和島藩さしまわしの使者とわかると、ただちに宿所を用意し、幕を張り、鄭重をきわめた待遇にきりかえた。

応接したのは本城清の弟、（清は本城家へ養子に入った身であった）、藩政改革を実行してめきめき頭角を現してきた江村彦之進で、彦之進は対面するうちすぐ、この二僧の来徳の真意を見抜いた、もし宗藩がこの勧告案に応じない場合でも徳山は単独で幕府に恭順するかどうか、それを打診しにきたのであろう、いわば長藩内部切り崩しの狙いであった。しかも勧告案の条件なるものは、長州藩を完膚ないまでに解体するほど、厳しい。

彦之進は山口の宗藩政府に馬をとばした。が、指示を仰ぐもなにも、宗藩自体も紛糾していて、二日も待って無駄であった。

徹底抗戦するか、恭順してほそぼそと生き長らえるか。

混乱する城下の気配をよそに、二僧は宿所にあって獲物の落ちてくるのをじっと待っている、回答期限はあと五日を残すのみ。

彦之進が宿所を訪れたとき、二僧は、恭順するより他に策はあるまいと信じて疑わず、その態度はじつに傲慢無礼をきわめた。彦之進が、いますこし恭順条件をゆるやかに「ご調停賜りたく」というと、二僧は「毛利氏の命、旦夕に迫った今」貴藩に残された道は、お受けするか否か、であって、駆け引きの余地はない、と撥ねつけた。命、旦夕……は、口に

してはならぬ恥辱であった。彦之進も、憤然となった。
彦之進が独断で宇和島藩の調停を蹴った、との噂は、怖しいほど早く城下にながれた。
俗論派は失望し、怒った。
するとそのうち、俗論の頭領である富山家老がひそかに、二僧のもとへ「徳山のみ恭順する意志がある」との文書をとどけた、との噂が流れた。
今度は正義派の者が会合し、こうなってはもはや富山家老を刺し、側用人も加判も、藩の上層部の俗論派を一掃するしかない、と、計画した。この会合には二十名をこえる同志が集まったが、珍しいことに裏切者はいなかった。にもかかわらず、同志の一人が家老刺殺に失敗、逐電したあと、あれほども迅速に俗論派が動いて正義派を検挙したのはやはり、漏洩があったからで、同志の者が帰宅して父親に話した、父親はその名をしかと耳にとめて、その紙片を富山家老にとどけた、そういう経緯があったからであった。
こうして俗論派は血塗れの手で藩の実権をもぎとった。

「本城清ほか二名の者と……」
「控えい。本城清どの、と申さぬか」
「はっ。本城清どのほか二名が、桜馬場の御用屋敷から浜崎の牢へ送られてきたのは、八月十五日のことでございました」

例年であればこの日は遠石神社の秋祭にあたり、着飾った老若男女が参道にあふれ、境内には物売りの屋台が目白押しに並び、お館（徳山三万石では、藩主の居所は城でなく館とよぶならわしであった）に、殿をはじめ家臣居流れて歌舞伎芝居をごらんになる、年に一度の賑やかな、たのしい日であった。
けれども昨年は、城下不穏の気配に祭囃子も聞こえていたかどうか、緊急の召し出しをうけた利兵衛は、番士詰所に急いだ。
やがて到着した三人は、
本城清　四十一歳
本来、学館教授であったが、近年、藩政改革の推進者として代官の職にあった。
信田作太夫　四十三歳
学館で大島流槍術指南役をつとめていた。
浅見安之丞　三十三歳
学館教授、ならびに世子（若殿）訓導役

ほかに前後して四名の若侍が到着、いずれも共同謀議に加わったとの嫌疑から逮捕されたものであった。
「三名は、いったん詰所にて、袴、帯、下帯もとらせ、囚衣にかえさせました。規則であります。扇子と手拭一筋は許されてはおりませぬが、渡したであります。

浜崎の牢は詰所を中央にして、広場を挟んで、東に本牢、西に揚り屋、と双方むきあいに並んでおります。本城どのは本牢一番に、百姓、庄助と合牢となられました」

「待て。百姓と合牢にした、と申すか」

「それには理由がありまして、入牢に際し、本城どのはもはや武士ではないゆえ、一般の科人とおなじく厳しく扱え、と、中川様が申されたせいでございます」

本城清の捕縛は八月九日であったが、即日、代官の職を剥いで学館の一室に幽閉され、その後さらに、士族の籍を除く、という屈辱を受けていた、それは他ならぬ中川奉行みずからの処断であった。

「井上唯一どの　本牢二番
庄原登美衛どの　本牢三番
岩崎　謙どの　本牢四番
信田作太夫どの揚り屋入り
浅見安之丞どの　おなじく
はい。本牢と申すのは、広さ畳三帖ほど、天井まで高さ五尺、羽目板で三方囲ったうえにさらに四方頑丈な格子をはめた一戸建て、それが五戸あります。揚り屋の方は科人相牢の場合が多うありますれば、広さ四帖半、三方羽目板囲いで東向きのみ（つまり、本牢に向きあって）、一間の格子があります。

夜具などは与えませぬ。古筵一枚がきまりであります」

利兵衛の口調はしだいに渓流に跳ねる魚のようにいきいきと、そして滑らかになってきた。

「待遇についてはどうじゃ」

「食事は、一日に米四合と塩三勺のきまりで、竹の割箸をさしいれ、水も適宜あたえまする。皆さま入牢ののち、私は身分と姓名を名乗って挨拶してまわり、牢番一同もおなじようにいたし、みなみな、さながら貴人に傅くように世話をいたしました。なんと申しても、七日前までは要職にあった方々でありますけえ。

牢は長らく無人でしたため、まず掃除をいたしましたるところ大変喜ばれました。またすぐに、筆墨さし入れの願い出があり、中川様は不許可を仰せでありましたが、私一存で便宜を計らいました。その他なんであれ、獄則はできるだけ寛やかにしたつもりであります。たとえば――。

飯と塩だけでは体が保ちませぬ。受牢を重ねた悪人はそこらの事情に通じて、なんとしてでも食い繋ぎますが、あの方たちはそれを知らず、また、たとえ知ったとしても、なさいませぬ。そのため、牢番たちは焼いた餅、干魚、柿や蜜柑などの果物まで、折にふれてさし入れておりましたが、私は一切あずかり知らぬ体で通しました。それでも、秋が深まるころには入浴時、入浴は月三度のきまりでありますが、みると、囚人たちの身体からはこそげ落したように肉が失せてゆきました」

「よもや、虐待の事実はあるまいな」
「まったくもって毛一筋もさようなことはありませぬ。ただ政治犯でありますから警戒は厳重で、一人の囚人につき牢番五人が付いて、見廻りは半刻ごと、夜はさらに九人に増番して、間断ない看視でありました」
利兵衛はここで、顔をうつむけた。
詰所は人いきれでいっぱいもむうっとしていた。炉端に坐れない者は縁台の古いのをもちこんで、土間で腰かけている有様、これだけの頭数の費用も侮れなかったが、いったい、こうまで増番する必要があるのか、どうか、利兵衛が中川前奉行にそれをいうと、前奉行は過激に蒼白となって、家中の正義派が牢内の同志を奪回にくるのがわからぬか、と利兵衛を罵倒するのであった。
今にして思えば、すべては前奉行の脅えからくる妄想にすぎなかったのだが、当時の利兵衛は前奉行が要人だから、より詳しい情報をもっていると信じて疑わなかったのであった。
情報……囚人たちが一番飢えていたのは情報だった。囚人たちの時は八月九日の早朝、それぞれが自宅で突然に逮捕されて以来、停止したままになっている。囚人たちはその、八月九日以降の時を遅ればせに追いかけようとする。
長州はどうなったか、徳山も恭順したのだろうか、家族や親類はどうしているか、お咎めとなれば邸を出てゆかねばならぬが、どこへ行ったであろうか。
誰かの牢の格子に手拭がまきつけられると、それが合図だった、囚人たちは新しい情報のもたらされるのを心待ちにした、そして囚人たちはかなりの情報を知っていた……（しかし、やがて、外界に刻々と流れてゆく時と牢内での時の速さが違うことを身にしみて知るようになると、外界のことにしだいに無関心になってゆくのであったが）。
ある薄暮のころ、牢内見廻り中の利兵衛は名をよばれた。浅見安之丞の揚り屋の前であった。
「わが弟、兒玉次郎彦殺害の前後の様子、存じているなら話してくださらぬか」
次郎彦は兒玉家へ入婿したため、兒玉姓となった。巨漢だったが人間の器も狭い徳山には入りきらなかった。大坂蔵邸詰めとなって資金調達に成功し、帰国するとすぐ大目付、二十三年歳の若さながら次の藩を担う人材と注目された若者であった。
八月九日しらじら明けに暴漢数人が邸内になだれこんできた。斬りあいの後、次郎彦は森家老邸に連行する、といった相手の言葉を信じて縛についたのだが、それは虚言でしかなかった。
「そうであったか。
たばかられて刀を捨てた弟の無念、いかばかりであったろうか。兒玉邸から救援を求める者がわが家へ走ってきたとき、自分もすでに暴漢に囲まれていて身動きできなんだのじゃ」

安之丞も森家老邸へ連行するといわれたのであったが、帯刀のままなら同道するとゆずらなかったため、辛くもまだ生きている身であった。

「で、そやつ等の名前は」

暴漢たちに対する形ばかりの取調べはあった。陪席した利兵衛は、次郎彦に組みついてともに庭へ転落した者の名も、縄尻をとっていて、門を出しなにどんと次郎彦の背を突いた者の名も、塀にもたれて待っていて、背を突かれて前のめりになった次郎彦の首を落した男の名もすべて知っていた。その犯人の男たちとお館へゆく堅登(たてのぼり)の大路ですれ違って心が冷えたことも、何度かある。

けれども安之丞が今更、犯人の名を知ったところで詮なき仕儀じゃと、利兵衛はとっさに偽わった、「それはわかりませぬ。それに第一、下手人はいくら取り調べても真実を明かすものではありませぬ」

利兵衛の言葉は意外だったのであろう、とっぷり暮れて人の形も判然しない檻の奥で、安之丞は無念やる方ない鬼の哭くような呻き声をあげた。

しかし検死した側(がわ)からいえば次郎彦の死よりも、本城清の弟、江村彦之進の死体は凄惨をきわめていた。

その八月九日早暁、兒玉邸襲撃と同時刻、べつの暴徒の一隊が江村邸めざして走っていた。門を叩いて「あけろ、あけろ」を連呼したが、前夜すでに禁足、閉門の達しをうけているからと、彦之進は面会はもとより同道など以てのほかと応じなかった。そこで暴徒たちは「君命」と偽って門をあけさせ、彦之進を捕縛し、森家老邸へゆくといって辻から辻へと引き廻して曝し者にしたのち、殺害した。

火急の召し出しで現場に駆けつけた利兵衛は、亡骸を一目みるなり息をのんだ。左側頭部に番士の六角棒で殴られた傷、脇腹深く抉られ、右手欠落、そのうえ全身滅多斬り……縛られて無抵抗な彦之進を藁人形のように立たせておいて、いっせいに襲いかかったものとおもわれた。しかも現場を見廻した利兵衛は、この辻は江村邸の目と鼻の先、と気付いてじわじわと寒気が這い上るのを感じた。暴徒たちは故意にこの場所を選んだ、政権が絡むとこれほど憎悪も深くなるものなのか。兇行時刻は朝六ッ半（七時）、江村家に死体引き取りの許可が出たのが夜五ッ（八時）、古筵をかけられ蝿の群がるにまかせた彦之進の遺体が、それほど間近で丸一日放置されていたことなど、家族は何一つ知らなかったであろう。

利兵衛はおそらく徳山初まって以来のこの騒動をおもいだしながら、安之丞に問うてみた、「本城様は合牢の庄助相手にいたって物静かな日常を送っておいでになります。もしかしてご舎弟遭難のことをご存知ないせいかともおもいまするが」

すると、

「よく、存じておられる」

「は……」
「私なら怒り狂うが、あのお方は違う。利兵衛どの、偉いお方は不自由なものじゃ」
低声でそんな会話を交わしてから、利兵衛は安之丞に心の交流のようなわずかな親しみを覚えるようになったが、それはあとのことである。

それより先、八月十九日に新しい入牢者があった。
本牢二番の井上唯一と相牢の沙汰で、その前に連れてゆくと、「佳蔵ではないか」と井上唯一は大声を出して思わず立ち上り、いやというほど天井に頭をぶっつけてひっくりかえった。
佳蔵とは河田佳蔵、富山家老を刺しにいってこの騒動の発端を作った若者で、刺し損じた佳蔵はその場から岩国領へ逃れようとしたが関所で捕えられ、徳山へ送還されてきたのであった。
その夜、二人の話し声は徹宵絶えることがなかった。
この二人の取り調べは頻繁に行われた。
佳蔵への訊問はとくに厳しく、突棒、刺股（さすまた）、袖搦みなどの捕物道具を飾りたてた奉行所に曳きだされ、富山家老刺傷の前後……、富山邸のどのあたりで、どのように斬りつけたか、刀の鞘を玄関式台に放置してあったが、抜身をどう隠して往来を歩いたか、岩国領をめざした理由は、その径路は、路銀は、と、おなじ質問が峻烈な口調でえんえんと繰り返され、きいている利兵衛も疲れるほどであった。
唯一の罪は三月に側用人邸を焼き打ち（これも未遂）の嫌疑、その足で馬関に奔って奇兵隊に入隊し、さらに蛤御門の戦に脱藩して上洛軍に加わった、ことなどである。
連日、取り調べを重ねるうちにも秋は深まり、牢を囲む樹木は黄葉し紅葉し、夕焼空はただならぬ色彩に燃えあがって恍惚たる美しさを見せるかとおもうと、たちまち黝ずんだ流血の色に変って暮れてゆくようになった。
十月七日、恒例で、この日、囚人の衣服を綿入れとした。
次の夜、静かな闇にかすかに櫓の音がひびいた、浜崎の牢は海辺に近いのである。
番士の一人がさくさくと砂地をふんで本牢二番前にゆくと、「林謹治様、ただいま馬島（うましま）遠島になられまする」と、謹治の弟、佳蔵に告げた。徳山の南の海上に、ちょうど大きな馬が蹲居した形に黒く静まっているその無人島での日日がどんなものか、徳山の者なら誰知らぬ者はなかった、時折、食料の補給はあり、住むための小屋もある。が、生きて帰った者の名をきいたことがない。
次の処刑は十月二十四日にきまった。
前夜、中川前奉行から予め申し渡しをきいていた利兵衛は、寅の刻七ッ（午前四時）に詰所を出た。牢の塀沿いに茂る楠

や椎の大木が異形の怪物にみえるほどあたりは暗い、そして、寒い。広場に穴を掘る二人の番士の息が白くみえている。小石が鍬の刃にあたって撥ねかえる金属的な音もまじる。眠りの浅い囚人たちはみな、牢格子に顔をよせて注目していた。いま囚人たちの心中は、処刑されるのは誰か、自分か、自分でなく他の誰かならよいというのか、と、すさまじい葛藤で沸きたっているはずであった。

「そのくらいでよかろう」と、穴を覗いて利兵衛は言い、「もう半刻後じゃ。中川寺社奉行、町奉行、目付どの立会されるゆえ床几の数は四つ、手桶、柄杓なども抜かりなく用意いたしておくよう」といいつけてから、利兵衛は本牢二番に歩みよった。

「お覚悟のほどを」

佳蔵と唯一は顔を見合わせて頷いた。

刻限になって牢を出た二人は、これから野遊びにでもゆくかのように楽しげに、番士に向って「首はようく洗え。斬りやすいように襟の生毛も丁寧に剃っておけよ」と、冗談を言いさえした。

湯漬を所望し、酒の盃を干したあと、二人は見守っている同志の一人一人と深い眼差しを交わして別れの挨拶をした。そのころから二人は入牢中、羽目板を蹴ったり暴れたりしていた二人とは別人のように挙措が威厳にみちてきて、もはや別の世界に転じたかに見えた。含漱したのち東に向いて禁裏を拜し、ついで北にある藩主の館に一礼し、最後に西方にむいて威容を正した。

それからおもむろに辞世の歌を詠じる。

佳蔵が先によみあげた。

疎狂憂国欲排気　一片赤心聊報君
剣響忽醒廿余夢　他年誰弁正邪分

子を思ふ心は胸に満つれども
捨てゝ營め　君が千年を

唯一の声はよく透る美しい声であった。

潜身報国帝京間　幸脱重囲帰故山
此日終然逢斬戮　勤王未変赤心殷

蜻蛉（かげろふ）のあるかなきかの身をつめて
人の哀れも知られける哉

幼ないときから和歌の道に秀でていたせいで、唯一のはすらすらとした辞世であった。

血飛沫がかかるほど間近での処刑には、あきらかに「見せしめ」の意図があった。囚人たちは中川奉行の残忍さに唾棄

しながらも、眼前の光景から目が離せず、瞬き一つせずに見戍っていた。涕泣する者はいなかった。見事に死んだ、とかいいようのない感動が、皆に身動ぎもさせなかったからである。

利兵衛も目を洗われたような気がしていた。

死骸が運ばれてゆき、広場の穴が埋められ新しい砂が撒かれると、そこはもう、何もなかったような姿にもどる。けれども利兵衛の心中にはまだ、一点の汚濁も感じられなかった二十三歳の若者の死の清澄な余韻が残っている。それは、あの二人の、自分たちは悪事を犯したのではない、裁かれているのは思想なのだ、との信念からであろうか。

処刑のあった日は、詰所で線香をあげ、読経を唱える。昼、囚人、番士ひとしく一同に酒が振舞われる。

午後、雲が低くたれこめ、夕刻より烈しい雨となった。雨脚は砂地を叩いて、そのうちに氷雨にかわり、天も哭くかと思われた。

利兵衛はその雨脚を幸い、安之丞の揚り屋の前までいった。「河田様ご最期にあたり、毎日欠かさず記された獄中記と漢詩の草稿とを、これを自分が幼時から兄とも慕ってきた浅見どのへ渡しくれるよう、との遺言でありましたゆえ、どうぞ」

もちろん、中川奉行には内密であった。

安之丞は日記をしばらく撫でていたが、そのうち開いてみて、最後の條りになると記述は「牢番利吉こうせんを馳走してくれる」、「兼五郎、餅くれる」など食物のことのみになり、佳蔵自身も、「可慚。かく落魄すれば、所詮、心事鄙劣、飲食へ思案のほか無く、歎くべし」と書いているのをみて、おもわず慟哭した。そして我が身をかえりみれば、襤褸を纏い、寒気にふるえ、人間の尊厳などみじんもない境遇になっても、生きているかぎりは食わねばならぬ、飢えているかぎり頭を占めているのは飲食のことばかり、生き残った者の悲惨が痛切に身を噛むのを知るのであった。

十月はこうして過ぎた。

十一月も過ぎた。

十二月もすぎようとするのに、獄中の者にはただ一回の取調べもなく、無為に放置されたままであった。利兵衛がそっと安之丞にそういうと、「本城どのを取り調べられるほどの者が、今の俗論政府にいようか」との答えであった。

宗藩の俗論政府は、蛤御門の戦に出陣した三人の家老の首を幕府の尾張総督にさしだし、藩主父子を閉門蟄居、城とりこわし、と幕府の示した恭順条件をすべてのんで、藩の存続を計ろうとしていた。

（続く）

二〇〇一・十一月